

武田泰淳著『信念』考

——敗戦後の自己否定 三島由紀夫著『英霊の聲』へと繋がるもの——

長 田 真 紀

一

戦後派作家の旗手であった武田泰淳が、昭和二十四年（一九四九）六月に発表した『信念』（文藝春秋新社発行）オール讀物「同月特大号」^①は、第二次世界大戦の敗戦後の日本および日本人を考えるにあたり、看過できない文学作品である。

筆者（長田真紀）は、拙稿「武田泰淳著『信念』考——占領期の文学としての視座から——」^②において、武田泰淳が『信念』を発表した当時の、GHQの占領下という特殊な時代と社会の様相を鑑みながら、作品執筆にあたり着想のきっかけとなったであろう歴史的事項（廣瀬武夫中佐の銅像の撤去）や戦後文学としての存在意義を考察した。

本稿ではそれに引き続き、『信念』に武田泰淳が潜ませた、敗戦後の日本および日本人を覆い尽くした自己否定の問題について考察を及ぼしたい。それは、三島由紀夫の『英霊の聲』（昭和四十一年六月河出書房新社発行「文藝」）にも繋がる問題である。

二

武田泰淳は『信念』を、具体的な時代、場所（国）、登場人物等を設定することなく寓話的に描いた。そこには、いかなる時代、いかなる国においても、敗戦国における生き残った將軍と戦死した兵隊の遺族の姿として読むことができる普遍性と、同時にこの小説が発表された敗戦後の傷跡がまだ生々しい昭和二十四年

(一九四九)当時の、敗戦国民である作者武田泰淳と読者だけが言外に密かに強く共有できた感情という特殊性がある。つまり、寓話としてしか表現できなかった必然性でもある。

まずは、作品の梗概を述べる。

凱旋將軍となれなかった將軍は、人目を忍んでこっそりと帰郷した。もし誰かが將軍に会ったとしても、將軍とわからぬほど「憔悴」しきった姿であった。

帰郷した將軍は、古い城壁のある丘に堀を背にして建てられてあつた自らの銅像を見に行った。故郷の英雄として建てられた銅像は、サーベルを握って傲然と町を見下ろしていた。それは、今では他人のようであつたが、將軍は苦笑しながら、その場を立ち去りかねていた。

ある日、青年達によって、銅像は打ち倒された。銅像の顔は、「空を仰いで、やはり傲然として」いた。

ふと見ると、銅像の石の土台に、老婆が一人しゃがみ込んでいた。「この方は偉いお人だつたのに」なにしろ遺骨も公報もあてにはなりません。あてになるのはこの御方だけですから「あの方が生きてござらつしやれば、倅も生きてるでさ。あの方が死になさつたら、倅も死んでるでさ」と、老婆は目の前にいるのが、

銅像の本人、將軍であることに全く気づかぬまま語り始めた。老婆の息子は、將軍の師団に入隊していたのである。

將軍は、ぎよつとして足がすくみ、その場から離れた。

それ以来、將軍は老婆に遇うのを恐れた。銅像は「泥しぶきで汚れ」、まだ倒れたままであつた。「自分の分身」が、惨めに、ぶざまに、地面に転がっているのを悲しんだ將軍は、「いつそ堀の中へ落ちてしまへばいいのに」と思い、自ら自分の銅像を堀に落とすべく努力する。

そしてある日、銅像は「枯草の斜面をずり落ち」、「鈍い音をたて、白い輪の泡を吐きながら堀の底へ沈んだ」。將軍は「呆然と」堀の水面を「見下して」いた。

その時、將軍は後から強い力で背を突かれ、前のめりに倒れた。「何ていふことするだ！罰当たり！」怒りに身体を震わせた老婆が夕闇の中に佇み、「何てまねをするだあ。あの御方に……」と、「呪ひ」、「唾をはきかけ」、「泣き叫びながら」丘を走り降りて行った。

(引用文) 「の表記は原文のママ」

兵隊が命を懸けて戦争に邁進するためには、その戦争が、間違いない正義と崇高なる理念によって貫かれていることが必要である。そうでなければ、戦争は単なる殺人という犯罪行為となっ

てしまうからである。そして、自らが配属された軍の将軍が、尊敬し理想とすべき人物であり、その将軍への揺るぎない全身全霊の心服が必要である。神聖とも言える大義と理想とする存在としての将軍のもとに戦うからこそ、兵隊は自らの命を懸け、戦いに死力を尽くすことができるのである。

息子(あるいは夫、父、兄、弟)の命を預けた母(家族)にとっても、それは全く同じなのである。

将軍にとって銅像が「自分の分身」であるように、老婆にとっても将軍の銅像は、「将軍の分身」にはかならない。

その銅像が、ある日、青年達によつて打ち倒されたのである。

老婆は、倒された将軍の銅像の土台にしゃがみ込み、相手が銅像の本人であることに気づかぬまま、息子が将軍の指揮する師団に入隊したこと、遺骨も戦死公報も信じられず、将軍の存在に息子の生還の一縷の希望を託していることを語る。

老婆にとつて将軍は、唯一心の支えであり、将軍の生存は、すなわち息子の生存であった。その強烈な信念によつてのみ、遺骨や戦死公報が届いた今でも息子の生還をひたすら信じ待ち続け、毎日、将軍の銅像を拜みに来ることで、苦しい日々を辛うじて生きているのである。

それまで国の英雄であった将軍とその銅像も、敗戦後においては、もはや無用の存在でしかなくなつた。それまでのものが、これからの新しい時代を生き、新しい社会を築いていく青年達によつて否定されるのは、いつの時代、どの国でも常である。それまで崇められていた存在が、掌を返したように見向きもされなくなり、それどころか嘲笑され罵倒される。それまで崇められてきた銅像もまた、往々にして引き倒されることも多い。とりわけ政治家や軍人の銅像はなおさらである。

一方で、将軍の銅像を毎日仰ぎ見ながら、息子の生還を信じてきた老婆にとつては、その銅像が引き倒されたことは、悲痛の極みであった。自分の強く信じている存在が、他者によつて(青年達によつて)否定されたからである。

しかし、倒された銅像は、「青黒くこはばつた銅の顔は空を仰いで、やはり傲然としてゐた」。だから老婆は銅像の土台にしゃがみ込み、花束も置き、「この方は偉いお人だつたのに」と、将軍を労むるかのようには話し始めるのであつた。この時点では、将軍の銅像は(将軍の分身は)、倒されたものの、老婆のすぐ傍にある(いる)。まだ、見ることも、触ることもできるのである。

しかし、老婆に遇うのを恐れ、「自分の分身」である銅像が「はじめに、ぶざまである」ことを悲しんだ将軍本人によつて、銅像

は堀の底へと沈んでいくのである。

ある夕方、銅像は傾き、枯草の斜面をずり落ち、そして鈍い音をたて、白い輪の泡を吐きながら堀の底へ沈んだ。彼は痛む腰をのばして、しづまりかへつた堀の水面を呆然と見下してゐた。

突然、強い力で背を突かれ、彼は前のめりに倒れた。「何ていふことをするだ！ 罰あたり！」あの老婆が怒りに小さな身体をふるわせながら夕闇の中に立つてゐた。「あの御方に対して、何てまねをするだあ、あの御方に……」老婆は彼を呪ひ、彼に向つて唾をはきかけ、泣き叫びながら丘の路を走り降りて行つた。

これが『信念』の末尾である。將軍の存在だけが息子の生還の一縷の希望であると老婆が打ち明けた男によつて、大事な將軍の銅像が、堀の底へとずり落とされたのである。唯一の希望とも言える存在が、他者によつて（この男によつて）決定的に否定され、無残にも消し去られてしまったのである。もはや見ることも触れることもできなくなつてしまつた。それは、老婆にとつて、息子の生還が絶望的となつたことにほかならない。老婆の希望は一切断

たれたのである。

しかし、泣き叫びながら丘を降りていった老婆は、銅像を堀の底へずり落した男が、將軍本人であることを最後まで知らない。一方、この『信念』の読者は、自分が信じていた者が他者によつて否定され倒されていく姿のみならず、自分の信じていた者がその当人によつて否定され消されていく姿を見ているのである。

「あの方が生きてござらつしやれば、倅も生きてるでさ。
あの方が死になさつたら、倅も死んでるでさ」

と老婆は語つたが、將軍と老婆の息子はともに生還することも、ともに戦死することもなく、將軍は生き残り、老婆の息子は戦死したのである。そして老婆の目の前で銅像を堀の底へずり落とし、た男こそは、將軍その人だったのである。

早晩、果たして老婆はこの冷酷な事実を知ることになるのだろうか。

將軍が、老婆に遇うのを恐れ、「自分の分身」である銅像が、「はじめに、ぶざまである」ことを悲しみ、自ら銅像を堀の底へずり落としたことは、まさに完全な自己否定である。

しかし、將軍が將軍であつたことを自己否定したならば、老婆

の息子が戦争のために身を挺した尊厳ある生も、尊厳ある死も否定されることになる。

將軍の銅像を倒した青年達と老婆の息子は、おそらく年齢はそう違わないだろう。青年達は戦争に行くのをぎりぎり免れた年齢か、あるいは無事復員することのできた者達だろう。老婆の息子も生還できたなら、それまでの時代や社会を否定するか肯定するかは別にして、ともかく敗戦後の時代と社会を生きたことができる。しかし、老婆の息子には、「戦後」という時代も社会も存在しないのである。

銅像はまだ運ばれず、その全身は泥しぶきで汚れてゐた。自分の分身が、そんなにみじめに、ぶざまであることは彼を悲しませた。まるで自分が裸で地面にころがり、さらし物になってゐる気がした。

青年達によって倒された銅像は、將軍からみると、「みじめ」で「ぶざま」であった。しかし、銅像は、「その全身は泥しぶきで汚れてゐる」でも、「青黒くこはばつた銅の顔は空を仰いで、やはり傲然としてゐた」のである。

一方、將軍は、自ら銅像を堀の底にずり落とす直後、老婆か

ら「突然、強い力で背を突かれ、彼は前のめりに倒れた」。

どちらが毅然として將軍としての矜持を持ち立派であったか、どちらが「みじめ」で「ぶざま」であったかは、瞭然である。

三

このように『信念』では、青年達の手で打ち倒され、最後は元將軍自らの手によって堀の底にずり落とされる銅像、そしてそういった行為を目の当たりにし、深く傷つき、耐え難い悲嘆と絶望に陥った老婆が描かれている。

実はここには、敗戦直後の日本人の深く傷つき屈折した複雑な国民感情が、巧みに織り込まれているのではないだろうか。

戦前の価値観や社会を否定し、新しい日本の社会や時代を築こうと明るい希望を前向きに素直に抱けた者、敗戦までの過去を実は濃厚に抱え込みながら、過去の自分を否定し振り捨てていった者、大切なかけがえのない存在を戦争で亡くし、まるで取り残されたかのようにいまだに戦争を背負い続けながら生きている者、……。それらは、敗戦後の日本人にとって、自分自身であり、家族であり、友人であり、軍隊の上官であり、戦友であり、政治家であった。そしてさらには、誰かがいずれかに当てはまる、とい

うだけでなく、誰もがおそらくは複数の面を持ち合わせていたはずなのである。そのことを自覚的に意識することも、無自覚的に過ごすことも、あえて考えずにいよう、忘れてしまおう、と思うこともあったはずなのである。

さて、敗戦後それまでの自分を否定し捨て去った將軍の姿。そこには、戦争を生き延び、戦後派作家として戦後を生きることができた武田泰淳自身の姿が投影されていることはもちろんである。同時に、召集令状を受け取り、近衛歩兵第二聯隊で一週間の訓練の後、宮城前で遥拝し、日中戦争に出征していった武田泰淳にとつては、敗戦後、「人間宣言」をして現人神から人間となった天皇の姿とも重なるものだったのではないだろうか。

ここで、昭和二十一年（一九四六）一月一日に公布された、いわゆる「人間宣言」の詔書全文を掲げる。

官報 号外 昭和二十一年一月一日

詔書

茲ニ新年ヲ迎フ。顧ミレバ明治天皇明治ノ初國是トシテ五箇條ノ御誓文ヲ下シ給ヘリ。曰ク、

一、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ

一、上下心ヲ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ
一、官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人心ヲシテ倦マサ
ラシメンコトヲ要ス

一、舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ
一、智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

叡旨公明正大、又何ヲカ加ヘン。朕ハ茲ニ誓ヲ新ニシテ國運ヲ開カント欲ス。須ラク此ノ御趣旨ニ則リ、舊來ノ陋習ヲ去リ、民意ヲ暢達シ、官民擧ゲテ平和主義ニ徹シ、教養豊カニ文化ヲ築キ、以テ民生ノ向上ヲ圖リ、新日本ヲ建設スベシ。大小都市ノ蒙リタル戰禍、罹災者ノ艱苦、産業ノ停頓、食糧ノ不足、失業者増加ノ趨勢等ハ眞ニ心ヲ痛マシムルモノアリ。然リト雖モ、我國民ガ現在ノ試煉ニ直面シ、且徹頭徹尾文明ヲ平和ニ求ムルノ決意固ク、克ク其ノ結束ヲ全ウセバ、獨リ我國ノミナラズ全人類ノ爲ニ、輝カシキ前途ヲ展開セララルコトヲ疑ハズ。

夫レ家ヲ愛スル心ト國ヲ愛スル心トハ我國ニ於テ特ニ熱烈ナルヲ見ル、今ヤ實ニ此ノ心ヲ擴充シ、人類愛ノ完成ニ向ヒ、獻身的努力ヲ効スベキノ秋ナリ。

惟フニ長キニ亘レル戦争ノ敗北ニ終リタル結果、我國民ハ動モスレバ焦躁ニ流レ、失意ノ淵ニ沈淪セントスルノ傾キアリ。

詭激ノ風漸ク長ジテ道義ノ念頗ル衰へ、爲ニ思想混乱ノ兆アルハ洵ニ深憂ニ堪ヘズ。

然レドモ朕ハ爾等國民ト共ニ在リ、常ニ利害ヲ同ジウシ休戚ヲ分タント欲ス。朕ト爾等國民トノ間ノ紐帶ハ、終始相互ノ信賴ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ。

朕ノ政府ハ國民ノ試煉ト苦難トヲ緩和センガ爲、アラユル施策ト經營トニ萬全ノ方途ヲ講ズベシ。同時ニ朕ハ我國民ガ時艱ニ蹶起シ、當面ノ困苦克服ノ爲ニ、又産業及文運振興ノ爲ニ勇往センコトヲ希念ス。我國民ガ其ノ公民生活ニ於テ團結シ、相倚リ相扶ケ、寛容相許スノ氣風ヲ作興スルニ於テハ、能ク我至高ノ傳統ニ恥ザザル眞價ヲ發揮スルニ至ラン。斯ノ如キハ實ニ我國民ガ人類ノ福祉ト向上トノ爲、絶大ナル貢獻ヲ爲ス所以ナルヲ疑ハザルナリ。

一年ノ計ハ年頭ニ在リ、倫ハ朕ノ信賴スル國民ガ朕ト其ノ心ヲ一ニシテ、自ラ奮ヒ、自ラ勵マシ、以テ此ノ大業ヲ成就セシコトヲ庶幾フ。

御名御璽

昭和二十一年一月一日

日本人の個々の考えや思いにはもちろん違いはある。しかし、明治以降、国家として、国民集団として、天皇は崇高な「現御神」(現人神)であった。そう心の底から信じていた。それが、敗戦後、わずか五ヶ月足らずの段階で、大きく切り替わったのである。

朕ト爾等國民トノ間ノ紐帶ハ、終始相互ノ信賴ト敬愛トニ依リテ結バレ、單ナル神話ト傳説トニ依リテ生ゼルモノニ非ズ。天皇ヲ以テ現御神トシ、且日本國民ヲ以テ他ノ民族ニ優越セル民族ニシテ、延テ世界ヲ支配スベキ運命ヲ有ストノ架空ナル觀念ニ基クモノニモ非ズ。

この天皇の「人間宣言」に対する国民感情も、日本人一人ひとりにとって、実に複雑であり、簡単には表現することはできない屈折したものであったはずである。

武田泰淳は昭和十八年に発表した『司馬遷』の中で、「世界の中で心をなす絶対者は、その周囲の政治的人物の生き方の中に生きてゐる」と書いた。

「絶對者」を天皇に、「政治的人物」を国民に置き換えたならば、まさに敗戦後の日本の姿、自己否定に覆い尽くされた姿を、後年の読者も理解できよう。

四

三島由紀夫は、小説『英靈の聲』（昭和四十一年六月「文藝」）で、天皇の「人間宣言」をあまりにも明確に、そして痛烈に批判した。

「陛下がただ人間と仰せ出されしとき

神のために死したる靈は名を剝脱せられ

祭らるべき社もなく

今なほうつろなる胸より血潮を流し

神界にありながら安らひはあらず」

「日本の敗れたるはよし

農地の改革せられたるはよし

社會主義的改革も行はるるがよし

わが祖國は敗れたれば

敗れたる負目を悉く肩に荷ふはよし

わが國民はよく負荷に耐へ

試煉をくぐりてなほ力あり。

屈辱を嘗めしはよし、

抗すべからざる要求を潔く受け容れしはよし、

されど、ただ一つ、ただ一つ、

いかなる強制、いかなる彈壓、

いかなる死の脅迫ありとて、

陛下は人間なりと仰せらるべからざりし。

世のそしり、人の侮りを受けつつ、

ただ陛下御一人、神として御身を保たせ玉ひ、

それを架空、それをいつはりとはゆめ宣はず、

（たとひみ心の裡深く、さなりと思すとも）

祭服に玉體を包み、夜晝おぼろげに

宮中賢所のなほ奥深く

皇祖玄宗のおんみたまの前にぬかづき、

神のおんために死したる者らの靈を祭りて

ただ齋き、ただ祈りてましまさば、

何ほどか尊かりしならん。

などてすめるぎは人間となりたまひし。

などてすめるぎは人間となりたまひし。

などてすめるぎは人間となりたまひし」

.....

「天皇の赤子」として、自らの命を「陛下」と戦争に懸け戦死していった青年達にとつては、「神」であるべき存在からの裏切りでしかなかったのである。

敢えていうならば、『信念』の老婆の戦死した「伴」の痛哭とも考えられよう。

戦争を生き延び、敗戦後、新しい時代と社会を生きることができた者達がいる一方で、「戦後」という時間と空間を持ち得ないおびただしい数の戦死者達がいた。その戦死者達をひたすら待ち続け、戦後の時代や社会から取り残されたままの家族もいた。

『信念』の「伴」も、『英霊の聲』の青年も、『信念』の老婆も、見捨てて置き去りにされた、置いてきぼりになっている者達なのである。

さて、「オール讀物」昭和二十四年（一九四九）六月特大号には、「現代のダンテ ここに天国と地獄がある」の見出しのもと、『信念』を含む次の四編の短編小説が掲載された。（目次の見出しは、「現代のダンテ（アプレ・ゲール・コント）」である。）

『透明な微笑』 梅崎春生

『信念』 武田泰淳

『街の艶歌師』 峰 雪榮

『天国に結ぶ戀』 三島由紀夫

武田泰淳が『信念』に潜ませたもの、つまり、占領下の検閲が厳しく続いているなかで、ぎりぎりのところで寓話としてのみ描き得た敗戦国民日本人の決して単純ではない心の陰翳を、三島由紀夫は確実に感じ取ったはずである。

注

(1) 『信念』の初出誌については、『増補 武田泰淳全集』の別巻『増補 武田泰淳研究』（昭和五十五年三月 筑摩書房）に収録されている古林尚・制作「武田泰淳年譜」（今日、武田泰淳年譜の定本ともいふべき年譜である）をはじめ、従来、昭和二十四年十月とされてきた。しかし、初出誌の調査を行ったところ、昭和二十四年六月特大号の「オール讀物」であることが判明した。

(2) 「上田女子短期大学 紀要」(第四十四号 令和三年二月)

(3) 「新・東海道五十三次」昭和四十四年九月 中央公論社

(4) 東洋思想叢書『司馬遷』昭和十八年四月 日本評論社